

## 褒め上手な中村耕二教授

著者	胡 金定
雑誌名	言語と文化
号	22
ページ	23-24
発行年	2018-03-15
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00003102">http://doi.org/10.14990/00003102</a>

## 褒め上手な中村耕二教授

胡 金 定

2018年3月をもって、中村耕二教授が甲南大学の教育・研究の職場をご退任されることに祝福と感謝の意を表したいと思う。満腔の祝意を秘めながらも、桜の花の季節に中村教授とお別れすることはさみしい限りだ。

中村教授は本学の英語教育に多大な功績を残された。功績については本人の経歴からもうかがえ、他の先生も触られると思うので、私は中村教授の人となりを彷彿とさせるエピソードをいくつか紹介して、中村教授への感謝の気持ちに代えたい。

初めて中村教授にお会いしたのは、1995年11月の第1回「国際言語文化センター」教員募集面接の控室だった。翌年4月に国際言語文化センターに教授会が設置され、最初の専任教員として着任して以来の仲間といえる。

控室は面接前の不安と緊張、期待が入り混じり、ただならぬ雰囲気が漂っていた。その中で、「英語教員の応募でしょうか」と声をかけてくれたのが中村教授だった。一瞬にして気持ちがほぐれ、「古池や蛙とびこむ水の音」のような世界が開けたという時空だった。随分と救われた。

2回目は翌12月に実施した面接の時だった。1回目で勝利を勝ち取った人が呼ばれたわけで、お互いに採用に一步近づいたことで少し余裕も生まれ、笑顔でお話できた。その時初めて、私が中国籍であることに気が付いたようで、「日本語がお上手ですね」と誉めてくれたことは今でも記憶に残っている。

以来、公私ともに仲良くさせていただき、遠路遥々私の出身地である中国福建省廈門市までお越し下さったこともある。私の母校である廈門大学の英語教員や学生とも交流し、英語教授法の講演もしていただいた。英語の表現力はもちろん、国際的な感覚が高く評価された。また、私の日本永住資格申請の時には身元保証人を引き受けてくださった。そのご恩は生涯忘れることはできない。改めて謝意を申し上げる。

24年間、高等学校教諭として英語教育に情熱を注いできた中村教授は、その教育経験を生かして、精力的に甲南大学の英語教育改革に注力してきた。「英語＋ワン（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の中から一言語を選ぶ）」という教育方針を樹立し、実践してきた。この教育方針は甲南大学の外国語教育の特色となり、大学ランキング2010・2011「週刊朝日」進学MOOK（外国語授業に対する学生の満足度調査）では、全国10位にランキングされた。関西の大学で唯一のランクインで、名実とも「関西NO.1」になった。

「世界に通用する紳士・淑女たれ」という創設者平生夙三郎の教育理念をもとに、外国語教育の目的、目標を明確化にして、教育内容、教授法の見直し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成するために開発した「学習者中心、双方向でコミュニケーション的な教授法」による「使える・話せる外国語教育」を徹底してきた。これにより、単に二つの言語（英語と中国語など）が話せる人、いわゆるバイリンガルではなく、「バイカルチャー（言語だけではなく、二つの文化を理解できる人）」の卒業生を多数輩出している。

さらに、長年にわたり教職教育センターの教員養成科目を担当し情熱を持って授業を進められ、受講生に教師という仕事に魅力を感じさせ英語教員免許取得者も増えた。通訳・翻訳、グローバルな仕事をを目指す国際的な視野を持つ学生も育ててきた。授業や課外活動などにおいて中村教授の薫陶を受けた卒業生や留学生が世界中で活躍している。中村教授の講義や演習は甲南大学生に限らず、多くの留学生に深い感銘を与えるものだった。

中村教授は英語教育の域を超え、2001年4月～2003年3月1期2年にわたり、国際言語文化センター所長の要職を務められ、教育改革に手腕を振るって、国際言語文化センターの発展に多大な貢献をされ、優れた功績を残されている。

中村教授は熱心に人を助け、「褒め上手」な先生である。立派な教授が、人生のよき先輩が、ご勇退されることに不安も募るが、これまでご教示賜ったことを胸に刻み、甲南大学のためにますます精進していきたい。

結びに、中村教授の益々のご発展を祈願するとともに、甲南大学国際言語文化センターに対する長年のご貢献に感謝申し上げます。ご健康、ご長寿、ご多福を心からお祈り致し、筆を置くことに致す。

